

側面から考察する必要があると思われる。

そこで次年度は、オスの攻撃行動がどのような状況でおこるのか、それに対してメスはどうか対処するのか等について、交尾期と非交尾期に詳細な資料を得ることで、上記の仮説に結論を出す予定である。

ニホンザルにおける薬用植物の摂食とその効果

佐竹元吉・下村講一郎(国立衛試・筑波)

野生ニホンザルの動態調査グループが志賀及び房総で調査した食性に関する報告の中に多数の薬用植物が食用に供されている。

志賀では食用にした193種の植物中49種が薬用植物であり、房総では213種中30種が薬用植物と考えられる。

これらの中で重要な薬用植物はイヌガヤ、ハイイヌガヤ、コナラ、ヤマグワ、オオイタドリ、タムシバ、ホウノキ、コブシ、アケビ、ミツバアケビ、トリアシシショウマ、マンサク、ノイバラ、サクラ類、クズ、キハダ、サンショウ、ニガキ、トチノキ、ケンボナシ、マタタビ、ウコギ、ウド、タラノキ、シシウド、アオキ、シャクナゲ、オオバコ、ニワトコ、キカラスウリ、ヨモギ、ヤマノイモ、オシダ等である。

野生ニホンザルが多くの薬用植物を摂食することがわかったので、生態観察用ニホンザルに対して、摂食行動の観察を行った。実験に用いた薬用植物はチョウセンニンジン(根)、キキョウ(根)、シャクヤク(根)、カノコソウ(根)、トウキ(根)、センブリ(全草)、オウレン(葉と根茎)、キハダ(枝)の11種類である。

摂食行動が見られたのは、センブリ、オウレン、キハダの3種類であった。他の8種には摂食行動が見られなかった。根を食する行動が見られず、地上部の緑色の植物に摂食行動が見られた。

摂食行動が見られた3種は胃腸薬として、頻用されている植物であるので、ニホンザルの生化学的及び疫学的検討も考えたが、摂食量が少ないので、今回は検討を行わなかった。今後、薬用植物を飼料に配合して、服用させ、この面での検討を行いたい。

各種霊長類動物のヒト赤血球型活性と細胞内小器官内の血液型抗原分布

永野耐造・高安達典・大島 徹(金沢大・医)

I 諸種霊長類血球のヒト赤血球抗原型活性

20種63頭の血液について6種の市販モノクローナル抗体(MoAb)を含むヒト赤血球抗原型判定用試薬で凝集反応および解離法により検査した。従来の抗血清でチンパンジーはA型、テナガザルはBまたはAB型、ヒヒ、大部分のマカカ属、ヨザル、リスザル、ワタボウシタマリン、オオガラゴはB型、フサオマキザルはAB型、ブタオザルはO(H)型活性を示した。チンパンジー、テナガザル、ヒヒ等ではMoAbでも上記同様の型活性を示した。MN型では、チンパンジー、ヒヒ、マカカ属、ヨザル、ワタボウシタマリン、オオガラゴ等が弱いM活性を示したが、抗M MoAbでは全例陰性であった。N活性はチンパンジーのみ陽性であった。Lewis活性はチンパンジーなど8種でLe(a-b+)型、ニホンザルやベニガオザルでLe(a+b-)と(a-b+)の両型がみられた。

II 赤血球膜糖タンパクのヒト赤血球抗原型活性

チンパンジー、ヒヒおよびニホンザルの赤血球膜をSDS-PAGE後タンパクおよびPAS両染色を行うと、ヒトのバンドとは異なる様々のパターンを認めた。現在更に検討を進めている。

III 免疫組織化学的方法による組織細胞内血液型活性の検索：ニホンザル5例の光顕組織切片(ホルマリン固定・パラフィン包埋)を作製し、モノクローナル抗体とbiotin-avidin法で検索した。

ABO(H)活性：5例中3例でB活性、2例でH活性が血管内皮、脾臓腺房細胞と胃粘膜に認められ、血管内皮と同一活性が、肺胞上皮(B2例、H1例)、尿細管の一部(B、H各1例)と小腸粘膜(3例中B1例、H2例)で検出された。

Lewis活性：Le^a活性は肺胞上皮(3例)、大型肝内胆管(1例)、腎臓集合管と尿管の一部(4例)、脾臓導管(3例)、胃・小腸・大腸粘膜と血管内皮(1例)に、Le^b活性は大型肝内胆管(1例)、脾臓腺房細胞・導管(4例)と前記消化管粘膜で認められた。以上、本観察条件下では、赤血球膜のABO(H)活性、肝臓小葉間胆管の